タウンミーティングの名称	参加人数
君津地域タウンミーティング ー君津地域における生物多様性保全と市民生活のかかわりー	８０名
主催グループ名 君津地域タウンミーティング実行委員会	代表者名 鈴木 宗男

実行委員名（協賛団体）

NPO 法人ちば森林資源コンサーブ、千葉県森林組合君津支所、JA きみつ、君津商工会議所、君津市観光協会、清和県民の森、NPO 法人房総自然博物館、盤洲干潟をまもる会

開催日時

2006 年 12 月 4 日 14 時 00 分 ～ 16 時 30 分

開催場所

君津市役所６０１会議室

プログラムの概要

14:00ー14:15	（仮称）生物多様性ちば県戦略について（県自然保護課）
14:15ー14:30	話題提供１「君津地域における生物多様性の現状」（藤平量郎氏）
14:30ー14:40	話題提供２「農業とのかかわり」（ＪＡきみつ）
14:40ー14:50	話題提供３「林業とのかかわり」（千葉県森林組合君津支所）
14:50ー15:00	話題提供４「観光とのかかわり」（君津市観光協会）
15:00ー16:30	総合討論・論点整理

論点整理

1.解決が必要な問題

＜保護・保全＞

・倒伏が危惧される県指定天然記念物「三島の白樫」の保護（添付資料１）

・絶滅が危惧される房総丘陵のヒメコマツ個体群の保全（添付資料１）

・盤洲干潟、小櫃川河口域の自然環境保全地域への速やかな指定（添付資料１）

＜有害鳥獣＞

・イノシシ、サル、シカ、カワウ、ヤマビル等の有害鳥獣による農林・観光業被害

＜残土・産廃＞

・残土捨て場、産廃処分場の無秩序な立地、事業の途中放棄や業者の倒産による里山の破壊、環境汚染

＜川＞

・小櫃川には堰などの人工物が１７カ所あり、アユが遡上できなくなっている。

・川への生活排水の流入

・小糸川中流域で毎年のように発生する水害

＜森林＞

・林業の衰退にともなう森林の荒廃

2.現在:実践されている取り組み(効果と課題)

＜保護・保全＞

・「三島の白樫」について県に対策を打診したが断られた。地元有志が保存処置を検討中。
・ヒメコマツについては、有志の研究グループが調査研究や苗木の育成を行っているが、資金と人出が不足している。
・盤洲干潟、小櫃川河口域の自然環境保全地域指定については、平成元年より陳情中であり、議会の承認も得られている。
＜有害鳥獣＞
・イノシシ、サル、シカ等のほ乳類については地元有志による有害駆除を行っているが、県、市の補助はわずかであり、地元は過大な負担を強いられている。また、後継者不足も深刻な課題である（添付資料２）。
・カワウについては、地元有志による飛来数調査と食性調査を行っているが、有効な保護管理計画はない。
・ヤマビルは生息範囲を拡大しているが、効果的な対策をみつけあぐねている。
＜残土・産廃＞
・残土捨て場、産廃処分場の問題は個別の反対運動はあるが、総合的な取り組みはない。
＜森林＞
・ＮＰＯとして、間伐材の有効利用に取り組んでいる。

3.今後の取り組みについての提案(想定される効果と課題)
＜保護・保全＞
・「三島の白樫」の保護については、地元有志による対策への県からの承認と資金援助を。
・ヒメコマツの保全は県の事業と位置づけ、関係機関による協力と資金の予算化を。
・盤洲干潟、小櫃川河口域の自然環境保全地域指定は、県当局の速やかな対応を。
＜有害鳥獣＞
・有害鳥獣の駆除は地元の自助努力で行うのが効果的。県や市はそれを援助して欲しい。さしあたり、駆除の担い手確保のための被害農家による狩猟免許取得条件の緩和、有害鳥獣駆除報償費の増額、捕獲檻の無償貸与をして欲しい。
・捕獲したイノシシ等を食肉利用できるよう、処理施設を整備して欲しい。
＜残土・産廃＞
・事業許可審査の厳正化により、事業の途中放棄、倒産を防止する。
・県外からの残土受入れの制限や生物多様性や水質などの環境に配慮した事業計画等を盛り込んだ条例を制定し、県が適正管理するべき。
＜川＞
・小櫃川にアユが遡上できるよう、堰などの人工物の撤去や有効な魚道の設置を。
・川への生活排水の垂れ流しを規制する。
・小糸川中流域の水害を防止するため、川幅を広げるなどの対策を。
＜森林＞
・人工林間伐等の森林整備促進のため、県産材の需要拡大および間伐材の利用促進を。
・国有林や保安林を利用した健康増進や森林セラピーの推進を。

4.:行政、学校、専門家、県民、企業等への意見(期待する役割など)

・生物多様性の問題は単純なものではない。今回のＴＭで終わりにせず、今後も地域住民の声を聴く機会を設け、施策に反映させて欲しい。

・県は有害鳥獣の調査ばかりでなく、結果を出して欲しい。

・水源涵養地である源流部の森林の保全のため、下流からも協力して欲しい。

・かつての自然を取り戻すためには地域住民も自分たちで努力することも大事だ。

・新たな戦略を作るよりも、すでにある環境保護条例等が十分に運用されているのか検証をするべきである。その上で、県はゼロエミッションを基準とした政策を推進すべし。また、「環境憲章」を県の施設に掲げて欲しい（添付資料３）。

・県は必要な施策をすみやかに実行できる体制を作って欲しい。

5.自由記述

県内最大の森林地帯である房総丘陵から、東京湾に注ぐ小櫃川河口の盤洲干潟まで、多様な環境を擁する君津地域は、県内でも最も多様な生物が生息する地域である。この地域は千葉県の生物多様性の主要部分を担っているといっても過言ではない。その一方で、川、森林、干潟、里山といったそれぞれの景観において、個体、種、生態系の各レベルで保全を必要としている対象も多い。こうした自然の保護・保全対策は急務である。加えて、外来種の増加による在来生物の減少もみられ、早急な対策が必要である。

しかし、生物多様性に関するこの地域の住民の最大の関心は、何といってもイノシシをはじめとする有害鳥獣の増加と被害の拡大である。有害鳥獣の問題は、過疎や高齢化と相まって、山間地域では農林業の衰退の一因ともなっている。また、豊かな自然が観光資源となっている山間地域ではあるが、有害鳥獣の影響は観光産業の障害ともなっている。また、残土捨て場、産廃処分場が無秩序に増加しているのもこの地域の特徴である。これらの負担増大は環境や生物多様性に負の影響を及ぼしている。

現状では「生物多様性保全」という聞き慣れない用語は、地域住民の大半にとって「自分たちの問題」という認識とはほど遠い。一方で、とくに山間地域では「自然保護」イコール「有害鳥獣の繁殖を助長する都会の人間のエゴ」といった認識も少なくない。また、山間地域住民の中には、「山の自然は先祖代々自分たちが守ってきた」という自負もある。千葉県の生物多様性保全を推進するためには、こうした地域住民の理解と協力を得ることが不可欠であり、「都会 vs.田舎」という意識の対立の構図は放置できない問題である。そのためには、生物多様性保全を県全体の課題と考え、山間地域では生物多様性保全と農林観光産業振興を両立させ、地域住民の生活を守るという視点を欠いてはならない。

生物多様性保全や環境保全は単純な問題ではない。県は、今回のタウンミーティングを１回開いただけで終わりにするのではなく、今後も地域住民の声を聴く機会を設け、施策に反映する努力を続けて欲しい。また、県は現状の組織にとらわれることなく、必要な施策を実行できる組織体制を確立して欲しい。

タウンミーティングの名称	参加人数
環境・自然・里やまの山武市タウンミーティング	62名
主催グループ名	代表者名
環境・自然・里やまの山武市タウンミーティング実行委員会	木下　敬三

実行委員名

木下　敬三　　古屋　徹　　能勢　正代

開催日時

2006年　12月　9日　9時　00分　～　16時　50分

開催場所

山武市早船地区及び山武市成東文化会館のぎくプラザ視聴覚室

プログラムの概要

里山散策：山武市早船地区（市民活動で再生中の里山　谷津田）

講演：里山の自然誌（千葉県立中央博物館副館長　中村俊彦氏）

分科会：①絶滅危惧種の再生（さんむ・アクションミュージアム）

②里山にゴミは要りません（NPO法人　さんむ環境問題連絡協議会）

③食虫植物群落の今（成東・東金食虫植物群落を守る会）

④農業の再生は山武市から（ひゃくしょう谷津田の会）

⑤川を市民の手に（美しい作田川を守る会）

論点整理

2.解決が必要な問題

【環境基本計画】○ NPO法人　さんむ環境問題連絡協議会

不法投棄対策

家庭ゴミ対策

住民の意識改革

【環境基本計画】○美しい作田川を守る会

【生物多様性】　川を単なる排水路にしてはならない。

自然に配慮した改修工事をしてほしい。

成東・東金食虫植物群落は遊水地としても残すべきである。

食虫植物群落に引き込む水の富栄養化が問題になっている。

【生物多様性】　○成東・東金食虫植物群落を守る会
植物の宝庫である群落の保護。
追加指定地の復元への取り組み。

2.現在:実践されている取り組み(効果と課題)

【環境基本計画】○ NPO さんむ環境問題連絡協議会
不法投棄対策　監視パトロールの強化
里山の整備・利活用の推進
バイオマスエネルギー利用
家庭ゴミ対策　分別の徹底（リサイクル　リユース
バイオマスの利用を進め、ゴミの総量抑制）
住民の意識改革（学校やＰＴＡ，ボランティア団体などに
積極的に働きかけ住民の意識改革を促す）

【環境基本計画】○美しい作田川を守る会
【生物多様性】
水質モニターがそれぞれ定点監視。
多目的護岸、自然的護岸という考え方に力を入れている。
「作田川クリーンアップ作戦」の実施。
魚の産卵場所がなくなっているのではないか？

【生物多様性】　○成東・東金食虫植物群落を守る会
【環境学習】
管理団体の山武市に協力して活動している。
保護活動（大型植物の刈り取り、帰化植物の抜き取り、
ススキ株の掘り取り、野焼き）
広報教育活動（案内、植物カードの提示、夏休み子ども教室の
開催、ＨＰ公開、講演会　観察会）
各種調査（植生調査、水質調査）
食虫植物の増殖（ススキの掘り取り土の利用を考えている）
追加指定地の復元事業を興してもらいたい。
（ミュージアムパーク構想という夢を実現させたい）
行政も群落の貴重さをわかっていないのでは？
農作物と併せてキャンペーンを行いアピールしてはどうか。
文化資産、自然資産の見直す仕組みを作る必要がある
（市の認定制度など）
群落で説明すると喜んでもらえる（楽しく活動しよう）

【環境学習】　○さんむ・アクションミュージアム

【生物多様性】　里山に遊び場を提供して絶滅危惧種を増殖しよう。
（絶滅危惧種：里山で群れ遊びする子どもたち）
たんぼで米作り、どろんこ遊び。
生活形態の変化が子ども遊びに影響している。
親同士の結びつきが必要。
有形（緑）の自然も、無形（人と人との関わり）の自然も大切。

【環境基本計画】　○ひゃくしょう谷津田の会

【生物多様性】　谷津田の再生（冬水たんぼ　不耕起　無農薬　無化学肥料）
ひゃくしょうは「百笑」、楽しくやろう。
鳥の飛来や水路にめだか、どじょうなどが増えている。
この会の実践は環境に配慮した試みとして重要である。
生産した米のうまさの確認とその普及が求められる。

3.今後の取り組みについての提案(想定される効果と課題)

4.行政、学校、専門家、県民、企業等への意見(期待する役割など)

○河川改修などに際し、環境に配慮した方法を考えて欲しい。
○行政は自然資産、文化資産を見直して学校教育の場などで貴重さを教えるべき。
○学校は自然資産、文化資産のある現地に小、中学生を連れ出して欲しい。
○成東・東金食虫植物群落の追加指定地復元への早期取り組みを希望。
○行政は課の垣根を越えて施策を考えて欲しい（河川改修、食虫植物群落保護等）
○県職員の環境への取り組みは本気？
○企業は利益の？％を環境保全、福祉活動に提供する施策を。

5.自由記述

○報告書作成のみで終了しないで欲しい。
○タウンミーティングから生まれる施策を県民にわかる様にして欲しい。
○生物の多様性について環境の保全が大切などの言葉で終わらせないで欲しい。

タウンミーティングの名称	参加人数
環境タウンミーティングちば　第１分科会　生物多様性ちば県戦略	34 名
主催グループ名 環境タウンミーティングちば実行委員会	分科会担当 鈴木優子

担当実行委員名
鈴木優子　松永美和子　網代春男　太田藝子

開催日時
2006 年 12 月 10 日 13 時～16 時 15 分

開催場所
千葉県立中央博物館

プログラムの概要　小グループ討論とする（７，８名で４グループ）
１３：４５～　自己紹介「生物の多様性はなぜ大切か」について、自分の考えを話す
１４：１０～　「千葉県の生物の現状について」　県立中央博物館　倉西良一
１４：２５～　「生物の多様性を育むために必要な戦略・提案と、私達はどう関わるか」グループ討論
１５：４０～　各グループ発表　全体報告会への希望箇所をまとめる　分かち合い
１６：１５～　終了

論点整理

1.解決が必要な問題

①生物の多様性の大切さ、理解を得る話し合い、環境教育が必要。
②環境教育のしくみづくりが進んでいない。
③景観としての保全の必要。小規模乱開発の防止。
④ＧＭ菜種が県内に自生している、また一般圃場で実験栽培されている。生態系保全の立場から遺伝子組み換え作物
の交雑防止、地域固有種保全への予防基準について先進事例のある北海道を見習う必要がある。
⑤環境ホルモンに汚染された魚や水生生物が多い問題。水質浄化が必要。
⑥海、干潟、谷津田、乾田化、放置田、Ｕ字溝など水辺の生き物の自生地、生息地が失われていることから、これ
らの保全が必要。
⑦千葉県は農業が元気になれば、生物の多様性も守れる。一次産業をもっと大切に～食の安全と生物の多様性（自然）
を守るために農家の人もこのことを理解して欲しい。
谷津田を含む里山が荒廃している、人の手が加えられて守られてきた自然への対策。
⑧耕作放棄せずにすむような代替作物の推奨。
⑨経済に裏付けられた自然との共生出ないと人はのってこない。

2.現在:実践されている取り組み(効果と課題)

① 農無薬・有機農法は循環型社会作りに有効だが、一部の取り組みでしかない現状が課題。
② 谷津田の保全、稲の不耕起栽培・通年灌水が生物の多様性に有効だが、一部の取り組みでしかないことが課題。

3.今後の取り組みについての提案(想定される効果と課題)

① 千葉県の多様な生態系を保全し、そこに生きる私たちの**子どもたちを絶滅危惧種にしない**為に、環境と一次産業である「農」との位置づけを構築し、**市民と「農」のかかわりづくり**を提案する。
② **地域、社会での合意形成を築く**ことが大切。　タウンミーティングや地域の文化力の向上で。
③ 地域単位、流域単位で、絶滅を防ぐために、縮小分割された生息地を繋げる計画づくり。
④ まとまった面積の自然保護エリアを全県的に戦略的に配置する。メリハリ。
⑤ 北総台地の谷津田の保全を戦略的に取り組む　U字溝の見直しを。
⑥ **自然にやさしい農林水産業の再構築を今の技術を生かして取り組む、後継者の確保が課題。**
若者と農・一次産業が社会へ拡がり、つながり、情報発信、開示で一次産業の重要性をＰＲし、元気を取り戻す
⑦ **学校教育における実践的で日常的なプログラム。**住んでいる地域の環境調査、自然にふれる体験、実感教育に取り組む。
⑧ 川を取り戻す、排水溝から川へ。
⑨ ブラックバス、ブルーギル、カミツキガメ、放置オウム対策。
⑩ 遺伝子組み換え作物の荒廃を防止する対策。
＊＊　太字は特に総括大会で絶対、報告したいとの合意形成がされた提案です＊＊

4.行政、学校、専門家、県民、企業等への意見(期待する役割など)

①　(行政) 行政の役割の再認識。役所間での合意の形成、縦割りから環境という横の連携、学習機会、条例の策定、１次産業の振興を。
資源を循環し、自然環境を　後世に残せる政策づくり。
有機農業推進、干潟を保全する条例作り。
生物の多様性が失われる遺伝子組み換え作物や動物を持ち込ませない。開発、栽培しないきまりを作る。
小規模乱開発の防止、法律の規制。
②　(企業) 可能で効果のある所から、本当の自然再生を仕事として行い、生物の多様性、保全をめざす。
除草剤を減らすための企業の研究と助成。
③ (すべての主体に関わることとして) 情報開示と交流を進める。タウンミーティング、話し合い、シンポジウムを幅広い年代の参加で、経済分野の人とも話し合い時間をかけて決めて、決めたことを情報公開してほしい。
④ (行政・学校・専門家) 学校で農業を教えてほしい、特に後継者不足の農村地域では！
環境教育しくみづくり、実費支給を。

5.自由記述

生物多様性ちば県戦略は、「命の大切さ」、「循環」を基本に、全てを貫く基本理念として実効性のあるものにしてほしい。生物多様性の千葉県づくりへ。
「もったいない」精神を伝えよう。

タウンミーティング開催報告書			
会議の名称	環境タウンミーティングちば　第２分科会		
日　時	平成１８年１２月１０日（日）13：30～16：15		
地域・会場	千葉県立中央博物館（会議室）	出席人数	23人
主催団体	環境タウンミーティングちば		
プログラム	13：30～13：45　「千葉県環境学習基本方針」の見直しについて 柴崎　秀一氏　環境政策課 13：45～14：45　自己紹介（課題のひろい出し） 14：45～14：55　休憩 14：55～5：35　グループに分かれて話し合い 15：35～15：50　話し合い報告 15：50～16：15　フリートーキング		
課題のひろい出し（主な意見）	・市民団体が継続して活動する場が無い。 ・財政的なフォローが無い。 ・子ども環境講座に、大気などもあれば良い。 ・県の業務には限界がある。 ・県との協働はどのようにやるか？ ・一般の人の参加が少ない。（広報のシステムが無い。県民への情報提供が少ない） ・指導者の養成が必要。エコマインド修了生の学びの場と活用。 ・ESDに県でも取り組んで欲しい。（ESDの認識度が低い） ・学校による環境教育は、どの程度重きを置いているか？財政基盤が薄い。 ・学校は忙しすぎる。ほかに課題が多く環境学習への関心が薄いのが現状だ。 ・方針作りで終わっていないか？行動計画への参加するシステムが必要。 ・市民やＮＰＯが力をつけて自立することも必要ではないか。 ・環境学習施策に県が直接関わらず、財団法人千葉県環境財団を通して行っている現状がある。等		

解決に向けてのワークショップ ①人づくり　②学校	①人づくり 課題：一般市民は、環境問題に無関心であるので、環境教育の学びを支援する人を多数養成することが大切である。 提案： ・エコマインド要請講座修了生の活用。 ・NPO への入会の促進（出会いの場つくり） ・地域の問題を解決する地域もミュニティを育むリーダーが指導者となる。 ・指導者の評価方法の確立。 ・県職員自ら環境教育を実践する。 ②学校 課題：教員の資質→提案：学校における指導者の養成。 環境学習の取り組みに差がある 　→提案：環境教育の必須化。学習基本要領などの法制化が必要。 学校は忙しい、学校と地域,NPO との交流の場が少ない 　→提案：エコマインド修了生の活用、環境学習アドバイザーを県から市町村へと拡大する。（外部人材の活用） ＮＰＯに協力をお願いしたくても予算がない。 学校への期待が大きいが、現状はむずかしい。
解決に向けてのワークショップ ③協働と自立 ④裾野を広げる ⑤ESD	③協働と自立 提案：・環境学習アドバイザー制度は、講師を公募してはどうか(個人、団体) ・「環境学習推進パートナーシップ会議」（市民、NPO、行政(市町村)、事業者、学校などが環境学習に関する情報交換や事業の評価を行い、次につなげる。その事務局を NPO が受託してはどうか。 ・県の環境学習事業を環境財団と NPO で競合させてはどうか。 ・協働強化のために基本方針は、県と教育委員会と共管で作成する。 ④裾野を広げる ・日常生活と結びついた分りやすい体験学習。 ・市民団体だけでなく、県、市、町、村も関係させる。 ・市民の環境活動を進める方策(システム作り)(例：デポジット制) ・実践に向けての人材育成。 ⑤ESD 課題：ESD の認識が低い、県内で活動して欲しい。 提案： ・環境基本計画へ ESD の理念を位置づける。 ・環境学習基本方針の随所へ ESD の考え方を取り組む。 ・人〻の育成の中に、エコマインド修了生の再研修。 ・持続可能なまちづくり(農林、水産業、食育、企業等)の中に ESD の考え方が、入っている。
フリートーキング	コーディネーターの必要性（各主体間をつなぐ人。ボランティアでなく嘱託職員などの扱いで）

タウンミーティング開催報告書			
会議の名称	環境タウンミーティングちば　第３分科会		
日　時	平成１８年１２月１０日（日）13：30～16：15		
地域・会場	千葉県立中央博物館（研修室）	出席人数	13 人
主催団体	環境タウンミーティングちば		
テーマ	環境再生計画の見直しについて		
参加者	１３名（県職員３名を含む） 石橋（千葉市）、佐藤（千葉市）、青木（市川市）、荒野（千葉市）、福満（千葉市）、佐伯（千葉市）、江口（東金市） 県職員：　田島、平井、澤登（生駒） 県民の会：中岡、大山、植木		

	（1）環境再生基金の募金集めについて 基金が県民に知られているとは思われない。 基金の目標額300億と現在の11億というのは差がありすぎる。目標額の根拠、何をするために必要な金額（基金）なのかが理解されていない。 不法投棄されたゴミの処理は、税金で行えばよいと多くの人は考えている。千葉県内には大量（389 万トン）の不法投棄がなされ、それを除去するには莫大な費用（1 千 562 億円）がかかること、これを除去しなければ如何に環境が破壊されるかを広くしらせるべきである。 3．募金を、環境再生と負の遺産解消（不法投棄された産廃などのゴミの除去）の用途別に分けて行ってはどうか。募金が何のために使われるのかハッキリしたほうが分かりやすく寄付しやすいのではないか。 市川市が実施している、市民税の１％を自分が応援したい民間団体の活動支援に指定できる制度を環境再生基金にもあてはめてはどうか。 （2）基金の助成について 1、助成の性格からすると、民間の環境団体は自主的に活動している小さい団体の活動は５０％では利用しにくい。 助成金の上限を下げても良いので１００％助成とし、予算の枠内で団体数を考えて欲しい。 特にモデル事業活動に参加している団体の５０％は考えて欲しい。出なければこの先、参加団体の先細りになる。 2．民間企業から５０％、再生基金から５０％の助成を受けて、環境団体の金銭的な負担なしで利用できる制度はできないか。 助成金を活用したい団体が、活動内容を再生基金や、環境で社会貢献をしたい企業のまえでプレゼンテーションを行い、助成金を募るというような仕組みはどうか。 3．企業と環境団体が協同で環境問題に関して社会貢献できると思われるものにも基金から助成金をだせるようにする。今は市だけだと思うのでモデル事業の巾を持たせる。 例：成田ゆめ牧場では、ヒマワリ迷路をイベントの一つとして８月に実施しているが、種を取って搾油をすることはしていない。来園者（親子）が花をとり、ヒマワリアートを楽しめ、搾油体験もできるように財団の搾油機を貸し出すことを認める。また取れた油をＢＤＦにして、園内を巡回するトラクターの燃料に使う。園内には、環境財団と共同で環境に優しいＢＤＦ燃料でトラクターを動かしていることを看板で宣伝する。 ヒマワリの花の収穫や、ヒマワリアートのイベント、搾油を行うときは、環境団体がボランティアで手伝いにいく。 （3）モデル事業について 循環の体験活動として菜の花とヒマワリ栽培をおこない搾油までは実施できたが、搾油した油の量が少ないため貴重な絞り油を使っての石鹸作りや、ＢＤＦ燃料として活用するところまでは十分に示すことはできなかった。モデル事業の目指すところが、どこなのかによって、評価が異なってくると思われる。廃食油を全て石鹸にしたり、BDF 燃料にして利用することを目指すモデル事業であったのであれば、成果は不十分といえるが栽培や搾油体験を通して資源循環を考えるヒントにし、資源循環への関心を高めることが目標であれば、それなりの成果は達成されたといえる。

タウンミーティングの名称 北総里山タウンミーティング -生物多様性ちば戦略づくりにむけて-	参加人数 210～220人
主催グループ名 北総里山タウンミーティング実行委員会	代表者名 長谷川雅美

実行委員名

NPO法人ラーバン千葉ネットワーク・印西サシバ調査グループ・NPOせっけんの街印西・NPO法人せっけんの街白井・印西ゴミと暮らしを考える会・小林すみよいまちづくりの会・NPO 法人いんざいこども劇場・白井環境ネットワークの会・白井の自然を考える会・NPO法人しろい環境塾・北総生きもの研究会・白井社会ボランティアの会・NPO法人環境カウンセラー千葉県協議会・エルコープ・東邦大学理学部地理生態学研究室

開催日時

2006年 12月10 日 13 時 30 分 ～ 16 時 15 分

開催場所

東京電機大学福田ホール

プログラムの概要

① あいさつ（里山に囲まれたまちづくりをめざして、いま、私たちにできること）

② 趣旨説明 （県職員）

③ ――北総の里山物語―― （スライドショー）

④ イギリスのニュータウン開発の顛末に学ぶ（講演：池田志朗氏 文化ｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨ研究所）

⑤ ――生きものの声を聴こう―― （スライドショー）

⑥ 意見交換会

論点整理

1.解決が必要な問題

・里山自然が開発によってなくなってきている。どういうシステムで里山自然を守っていくかが課題

・森や農地の荒廃

・数十年前から穴を掘り産廃を埋めている場所が至る所にあり、そこが畑になっていたりする。畑の産物はもとより、浸み出し水（地下水）の弊害を考える対策が必要。

・民家から近い所が狩猟区になっていて、散歩するにも怖い。

・排水溝を通して汚れたものが、飲み水に直接結びつく川に流されている。家庭排水と共に、農薬の流入についても対策が欲しい。

・団地内街路樹の農薬散布

・所有権が強い日本では、他人の土地への要求は難しく、もともと住んでいる在来農家の方と 後

から住んだニュータウン住民との断絶があり、接点がなさすぎる。

・新住民がもともと住んでいる人様の土地をきれいごとを言って残せと言っている。

・自然保護といいながら排気ガスを出す車での里山探索を考え直して欲しい。

・印西の川には、日本中から集っていると思われるほどの多種の魚がいる。
千葉県の魚の現状は非常に変わってきているが、もとから何がいたのかを知らないとどれだけ荒れてきているかの現状も理解できないと思う。移入を止められないのか。

・嬉しい気持ちで歩き始めようとする里山で必ず目にするゴミの多さ。（アンケート）

・県政が、印西市まで届かない（アンケート）

・個人レベルの小さな開発をとめることが出来ない。斜面林の消失による谷津田の荒廃サシバの減少。（アンケート）

・町内会・自治会（人と人との結びつき）を活性化していかないと　地域に根ざした環境保全を実践していけないのが現状。

2.現在:実践されている取り組み(効果と課題)

・NPO 法人ラーバン千葉ネットワーク:里山観察会、里山水系ウォーク、コスモス畑作り、秋のコスモス里山まつり

・印西サシバ調査グループ:印西市を中心としたサシバの調査

・NPO せっけんの街印西・NPO 法人せっけんの街白井:廃食油のリサイクル、石鹸をつくる、廃食油をバイオディーゼル燃料(BDF)にリサイクル

・印西ゴミと暮らしを考える会:地球温暖化をとめる活動、「もったいない」を実践

・小林すみよいまちづくりの会:道作古墳の整備、小林ウォーキング、自然環境の保護

・NPO 法人いんざいこども劇場:親子の舞台鑑賞活動、子どもの自然遊び体験活動、子育て支援活動

・白井環境ネットワークの会:地球温暖化防止活動に関する学習・勉強・見学会の開催・生ゴミ堆肥化・野菜作りなど

・白井の自然を考える会:観察会の実施、ゴミ拾い

・NPO 法人しろい環境塾:里山保全活動、農業支援活動、子どもの環境教育活動、市民交流活動北総生きもの研究会:モニタリング調査、植生調査、散策路の提案、在来種の保護や生息地の保全への提案

・白井社会ボランティアの会:西白井周辺の清掃、美化活動、花一杯運動などへの協力、地球温暖化防止活動

3.今後の取り組みについての提案(想定される効果と課題)

・ニュータウンは、ｶﾞｰﾃﾞﾝ･ｼﾃｨとして都市的魅力と田園的魅力を両方備えることが必要

・これからのまちづくりは、周辺地域の生態系と調和させた地元の環境保全政策が必要

・里山を歩くことによって里山の素晴らしさを知ってほしい。里山を訪れる人によってコンセンサス（総意）が生まれる。

・集合住宅の中に里山を作りたい。（街路・住宅地内の落ち葉を資源として利用して、ミニ里山を作る。）
→里山を生かしたまちづくり+ゴミ減量+資源発掘

・企業庁所有の塩漬けの土地を利用して、里山として復元したい。（草刈を適度にして

ある雑種地は、交渉次第で利用可能）→里山の復元

・PUBLICK　FOOTPUS（散歩道）の提案（そこに住んでいる住民の方々の生活を最大限尊重し、話し合いのもと　古くからある道を遊歩道として利用させてもらう）→新住民と旧住民との交流+里山景観に対する感性の接点

・熱処理による竹、シノダケの加工（焚き火・野焼きによる、森中に広がる竹炭効果）→野外で燃やすという伝統をゴミ処理と混同されている現在の過剰反応への対応+下草処理によるゴミ回避（草丈 30cm 以上になるとゴミを捨てられやすくなる）

・自転車道路でつなぐ里山の提案→北総地域の特長を生かしたまちづくり・排気量削減

・シノ竹素材を使用した楽器ケーナの作成（ケーナには、白井産のシノ竹が最適）→
自然素材を利用した遊び道具の提案

・“森を良くしてみたい人”へ、遊休農地の借地と活用の提案→里山保全

・監視役（ゴミパトロール）の提案→里山保全

・在来の人と消費者との交流、融合により生まれる信頼関係に基づく農作物の生産・提供・生産地の貸借→里山保全・地産地消

・里山ウォーキングの主催により、多くの人に里山の良さを認識してもらう（アンケート）→仲間作り

・季節に応じた労働（アンケート）→一次産業主体の社会への前向きな回帰

・多くの団体・サークルが里山関連の活動をしているので、横断的なみんなに知らせる“情報誌”を出して欲しい。（アンケート）→ネットワークづくり

・季節に応じた労働（アンケート）→一次産業主体の社会への前向きな回帰

・10 年前、新住民の多くの団体が交流する場がなく、“祭り”という形で集り、活動を紹介しあっていた。10 年後の今は、市が交流する場を数多く開催するようになった。
まずは、市民たちがもっと気軽に交流する場を作ることから始めたらどうですか。
（アンケート）→ネットワークづくり・情報交換

・昔から住んでいる方々が提案する『未来に残したい里山』（スライドの別バージョン）
の作成（アンケート）→里山保全を地元の方自らが提案者となって里山 PR

4.行政、学校、専門家、県民、企業等への意見(期待する役割など)

・千葉県へ・・・水路の U 字溝は止めて欲しい。生きものにとって良好な水路の提案を県におこなって欲しい。

・県へ・・・環境調査を行い、まず現状把握をした上で生きものに配慮したまちづくりへ生かしていただきたい。そのためのお金を出して欲しい。

・県・市の教育委員会へ・・・県下の小・中学校で里山での環境教育の取り組みを推進して欲しい（各学校に近隣の里山・休耕田を割り当て、その地形に合わせた属地主義で各クラス毎に 1 年間管理に当たってもらう）→里山保全・休耕田再生

・私たちの飲み水の取水口は、手賀沼の排水口の下流部にある。どうにかならないか。

5.自由記述

実行委員の総括・課題の実行に向けての課題は別途資料